

食事パターンと γ -グルタミルトランスフェラーゼとの関連

南里妃名子¹、原めぐみ²、西田裕一郎²、島ノ江千里²、中村和代³、桧垣靖樹⁴、
今泉猛²、田口尚人²、坂本龍彦⁵、堀田美加子²、新地浩一⁶、小風暁¹、田中恵太郎²

¹ 昭和大学医学部衛生学公衆衛生学講座公衆衛生学部門

² 佐賀大学医学部社会医学講座予防医学分野

³ 聖マリア学院大学看護学部

⁴ 福岡大学スポーツ科学部

⁵ 福岡県筑紫保健福祉環境事務所

⁶ 佐賀大学医学部地域国際保健看護学講座国際保健看護学分野

背景：栄養素や食品は、血中 γ -グルタミルトランスフェラーゼ (GGT) の潜在的な決定要因であることについてこれまでに検討されているが、食事パターンとの関連については、不明なままである。本研究の目的は、食事パターンと血中 GGT との関連および生活習慣因子による影響について検討することである。

方法：この横断研究は、肝疾患の既往歴者および血中トランスフェラーゼ高値の者等を除外した 9,803 名の日本人 (40~69 歳の男性 3,723 名、女性 6,080 名) を解析対象者とした。妥当性が検討されている 46 食品の食物摂取頻度調査票を用いて、因子分析により代表的な食事パターンを抽出した。

結果：代表的な食事パターンは **healthy, Western, seafood, bread, dessert** が抽出された。食事パターンの因子得点 4 分位の最も低い群(Q1)に対する最も高い群(Q4)の GGT 高値のオッズ比は、男女ともに **healthy pattern** において有意な低下が認められ、男性で 0.72 (95% CI, 0.57-0.92; P for trend < 0.01)、女性で 0.82 (0.66-1.00; $P = 0.05$) であった。一方、**seafood pattern** では有意な上昇が認められ、男性で 1.27 (1.01-1.61; $P = 0.03$)、女性で 1.21 (0.98-1.49; $P = 0.05$) であった。また、男性のみ **bread pattern** (OR = 0.63; 0.50-0.80; $P < 0.01$) と **dessert pattern** (OR = 0.53; 0.41-0.68; $P < 0.01$) で有意な低下が認められた。食事パターンと生活習慣因子の交互作用を検討した結果、男性では、**seafood pattern** ($P = 0.03$) および **bread pattern** ($P < 0.01$) と GGT 高値の関連において飲酒習慣との有意な交互作用が認められ、女性では **dessert pattern** と GGT 高値の関連において、BMI ($P = 0.03$) または喫煙習慣 ($P < 0.01$) との有意な交互作用が認められた。

結論：食事パターンは、GGT の重要な決定因子である可能性が示唆され、それらの臨床的意義についてはさらなる調査が必要である。

キーワード：食事パターン、GGT、横断研究